NY エッセイ 44

中瀬有紀

夢の向こう



Manhattan across the East River

「あなたの日本での経験はアメリカの照明デザイン業務に全く役に立たない」とアメリカを代表する照明家が私に言ったのは4年前です。あれから4年間、自身の成果を基にその言葉を覆すことを目指してきました。私は、照明デザインに限らず、日本で得た技術と記憶が今の私を形成する強い基盤となっていると確信しています。しかし最近、悔しいけれどその言葉に同意せざるを得ない経験をしました。

1990年代にトニー賞ミュージカル作品賞にノミネートしたミュージカルの1つが今年リージョナル・シアターでリバイバル公演の開幕を迎えました。演出家はオスカー受賞者のハリウッド映画監督、照明デザイナーはトニー賞を幾度も受賞している巨匠で、両者が共同制作した映画は私が日本にいた頃から何度も繰り返し観ている大好きな映画です。偶然が重なり、私はそのミュージカル制作において彼らと仕事をすることになりました。

私が任されたのはアシスタント照明デザイナーの立場です。元々雇われていたアシスタントは、3週間の劇場でのテクニカル・リハーサルの2週目の終わりに解雇となりました。本公演の開幕初日まであと1週間という制作プロセスの最終段階に、アシスタントが変わるのは有り得ないことです。その照明デザイナーの大ファンだった私は、「今すぐに劇場へ来て欲しい」と早朝に電話を受けた後、すでに予定していたその後1週間のすべての予定をなんとか調整して、昼には劇場へと向かいました。私が客席のドアを開けたときにはすでに最後のランスルーが終わりプレビュー公演の準備が進められていて、この段階で私が来て何ができるのだろうか、と不安がよぎりました。それから1週間、私は滞りなく業務を全うし、ミュージカル初日は大成功でしたが、なんだか腑に落ちない違和感が残りました。

違和感の原因は、もちろん遅すぎた参加時期が挙げられますが、それ以外には私のアメリカ商業演劇の経験不足だと言えるでしょう。特に商業演劇はユニオンによる照明業界特有の働き方が求められ、その集団のチームワークの仕方が身にしみていないと、どんなに経験のある照明家でも初心者と判断されます。「あなたの日本での経験はアメリカの照明デザイン業務に全く役に立たない」という言葉は、「アメリカで再スタートだよ」というメッセージだったのだと気がつきました。今回、憧れの照明デザイナーと仕事をする夢は叶いました。さて、次は何を目指そうか。私は今新しい夢に向かう出発点に立っています。